

# 「言い誤り」(Speech Errors)の傾向に 関する考察(II)

伊藤 克敏

伊藤(1988)に引続き収集したデータの分析を行うことにする。先ず、音声関係の誤りから入り、統語、意味の誤りへと進む。

## I. 発音上の誤り

### 1. 同化現象

#### a) 順行同化

- (1) カタカタ (ナ)
- (2) どんぐりころころどんぐ (ぶ)りこ
- (3) 落ちち (つ)かない
- (4) すみまめ (せ)ん
- (5) 三井銀行だってみつ (よし)こさん……
- (6) フィラデルフィラ (ヤ)
- (7) なな (わ)りよんぶ [7割4分]
- (8) でん (げ)き浮上
- (9) すごい (も)つ [荷物]
- (10) 力がない (な) か (が)らも
- (11) しゅう (き)ょう [宗教]
- (12) 人材ば (ぼ)しゅう
- (13) うまく (と)める

(1)は同じ音節が繰返される「音節重複」(reduplication)の一種とみなされ、発音の容易化に貢献しているものと思われる。育児語(Baby Talk)にも同じような特徴がみられる(おてて、ぽんぽん等)。(7)(8)は同じ音の繰返しで、一種の「反響様言語模倣(症)」(echolalia)の現象とみなされよう。(10)は少々複雑で、「が」の濁音が後に移り「な」が「だ」になったとも考えられるが、一方、「ながら」の「が」の濁音が前

に移ったとも考えられ、決しかねる。

b) 逆行同化

- (1) かえれ (ら) れる
- (2) じそ (さ) ぼけ
- (3) くだの (も) の
- (4) 軍事費か (さ) くげん
- (5) セックル (ス) アピール
- (6) 横浜のこ (ほ) うなんかこないよ
- (7) 思った (と) ったのですが……
- (8) た (て) あれ [手荒れ]
- (9) トンボイ (エ) ンピツ
- (10) いく (け) ぶくろ [池袋]
- (11) 変動せい (そう) 場せい [変動相場制]
- (12) 販だい (ばい) 代金 [販売代金]
- (13) とだ (ま) どっている
- (14) 風景をいど (ろ) どる……
- (15) ロ (ヨ) ーロッパ
- (16) 大く (き) なわく組
- (17) 国際秩序をきざ (ず) きあげる
- (18) きゅう (きょう) 師の給料
- (19) 自分の属しているシェ (セ) クション
- (20) けしも (ご) む
- (21) まし (ち) だし [町田市]
- (22) かん (い) がんせん [海岸線]
- (23) 24ほ (お) うふく [24往復]
- (24) ち (き) ちんと
- (25) ベン (ー) トーベンテン [ペートーベン展]
- (26) ちょう (しょう) 業中心
- (27) 車きゃ (か) んきょり [車間距離]
- (28) 調子な (わ) るくもなるわ
- (29) コレスト (テ) ロール
- (30) りょう (よう) するに料理は気持だから……

- (31) 恋人ナ(リ)サーチがなされた
- (32) あだだ(な)だぞ〔あだ名だぞ〕
- (33) 自分でた(ま)いたたねだから……
- (34) お(ご)迷惑をおかけしました
- (35) 計算され(し)つくされている

(1)は、後続の〔re〕の〔e〕が先行の〔ra〕の〔a〕に取って代ったと判断されるが、一方、〔kae〕の〔e〕の同化とも考えられ、判断がつき難い。前後の〔e〕に影響されたとみた方がよいのかも知れない。(2)は後続の〔bo〕の〔o〕の同化とみられよう。(4)は後続の〔gen〕の〔g〕の調音の転移で〔s〕が〔k〕に変化した、と考えられる。もう一つの原因として〔s〕は発音困難音とされているので、〔k〕に変化しやすかった、とも考えられる(伊藤, 1985参照)。(14)は〔r〕音が〔d〕に転移したもので、幼児の発音においても〔r〕を〔d〕に代入する場合〔例, ダディオ(ラジオ)〕もあるので、難から易への転移とみなすことができよう。(17)は〔u〕が〔a〕に転移したもので、この場合も難度の高い〔u〕音から無標の〔a〕に転移した、といえよう。(19)は〔s〕から〔ʃ〕への転移で、後続の「ション」の逆行同化であるが、伊藤(1985, 1988)でみたように、〔s〕は構音難度が高いので、より低い〔ʃ〕に転移した、とも考えられよう。(22)と(25)は類似した誤りであるが、影響を及ぼす音〔n〕が二つ連続している、というのも同化促進剤になっている、と考えられる。音節重複の最たるものである。(32)では〔n〕が〔d〕    〔d〕に挟まれているので順行、逆行のどちらとも考えられるが、調音点が同じ前後の〔d〕音に影響を受けた、と考えた方がよいであろう。

## 2. 母音転移

### a) [i] → [e]

- (1) 大ブームにしてめ(み)せませ
- (2) しじめ(み)
- (3) かしわげ(ぎ)ゆうすけ〔TV News〕
- (4) 体制を確立することによれ(り)世界市場の安定を保てた
- (5) 振れ(り)分ける
- (6) め(み)ぶり手ぶり

(7) しょうれ(り)んじけんぽう〔少林寺拳法〕

(8) ろん(う)ね(に)ん〔浪人〕

[i] → [e] の転移 (shift) は、幼児音、方言音にも多い。例えば、幼児は「エンピツ」が「エンベツ」になりやすく、また、「みえない」が「めえない」, 「いばる」(威張る)が「えばる」に各々なりやすい。言語障害者にも [i] の発音はかなり困難なようである(笹沼他, 1986)。

方言でも「しらみ」が「しらめ」(鹿児島), 「いい」が「ええ」(大阪), 「ニンジン」が「ネンジン」(埼玉), 「いま」(今)が「えま」(青森)等となる(伊藤, 1986参照)。(3)(6)(7)は同化現象とも考えられるが、たとえそうであっても, [i] が [e] に転移しやすいことにはかわりがない。(8)は「ろうにん」(浪人)が意図する発話で、次のように二重の音変化となっている。

①逆行同化 「ろうにん」→「ろんにん」

② i → e 「ろんにん」→「ろんねん」

b) [o] → [a]

(1) こんだ(ど)は……

(2) 資金えんじゃ(じょ)

(3) しゅうた(と)く物

(4) すが(ご)いです

(5) ちゃ(ょ)っと……

(6) もた(と)の位置

(7) しゃ(ょ)くむを怠る

(8) 風前のとま(も)しび

(9) 三かしゃ(ょ)の〔三箇所〕

[o] が [a] に転移する現象は、「しょうがない」を「しゃーないな」とくだけた表現で言う方言(関西)にもみられる。また、幼児は初期において「トウサン」を「タアサン」という段階がある。

c) [e] → [a]

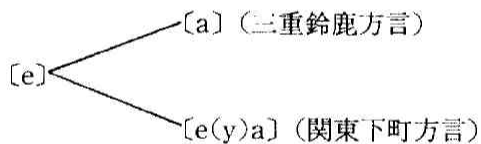
(1) 行くわけだ(で)すから……

(2) なってくるにつら(れ)て

(3) してはいか(け)ない

- (4) とうさ(せ)ん
- (5) 他のサ(セ)クションで話し合った内容を……
- (6) 確保するためのもくた(て)きとしたもの
- (7) これを排除するたま(め)のアメリカの自衛権……
- (8) 見た(て)びっくり……
- (9) 応さ(せ)つセット
- (10) おめでた(と)うございます
- (11) そうだ(で)す
- (12) ほんとうだ(で)すけれども……
- (13) もた(て)あます

筆者の出身地である三重県鈴鹿地方の方言で、(11)のような形で「そうだすか」(そうですか)を使っているのを耳にしたことがある。(12)は関西地方の方言で聞かれる表現である。(13)は[e]が[a]に転移したものである。関東の下町言葉では「そうですか」が「そうでやんすか」に、「何を言ってるんだ」が「何を言ってやがんだ」になる。これを図示すると次のようになろう。



d) [u] → [a]

- (1) ふか(く)まれている
- (2) 南北問題をめが(ぐ)る世界の構造……
- (3) もうさ(す)ぐ
- (4) 三しゃ(ゆ)るい〔三種類〕

e) [a] → [e]

- (1) ひよこみてえ(たい)
- (2) ぶんて(た)ん
- (3) トレ(ラ)ブル
- (4) こぜ(ぎ)ら〔小皿〕

音韻變化的にみると[a]が[e]にかわる例がみられる。例えば、水が音をたてて流れることを「ササラグ」と言っていたのが、名詞形の「ササラギ」になり、現在使われている「セセラギ」になった、といわ

れている（田井，1978）。

f) [u] → [o]

- (1) 研きょう（ゆう）する
- (2) グロ（ル）メサラダ
- (3) 下じょ（ゆ）ん〔下旬〕

音韻変化的にみると [i] → [u] → [o] の変化過程が看取される。例えば、「意気意地」の省略形である「イキジ」（意気地）は「イクジ」を経て「イコジ」（意固地）、「エコジ」（依怙地）に転化した（田井，1987）。

g) [a] → [o]

- (1) グラナド（ダ）では……
- (2) 部屋がくろ（ら）い
- (3) 地盤沈こ（か）〔沈下〕

音韻変化では「イタク」（甚く）が「イト」（甚）に転化した，といわれる。また、「ナナカ」（七日）は「ナノカ」に転化し，現在では「ナヌカ」が普通形となっている（田井，1987）。

### 3. 音 変 換

a) 隣接音との交換

- (1) こんなとこ（こと）するの
- (2) 過失しち（ちし）〔致死〕
- (3) 高まし（しま）や〔高島屋〕
- (4) 高しやま（まや）〔 〃 〕
- (5) ひまぎ（ぎま）づく
- (6) コラロ（ロラ）ド
- (7) コロドラ（ラド）
- (8) 食器なだ（だな）
- (9) 追いかけて来たっちゃ（ちゃった）
- (10) 大こうきょう（きょうこう）〔大恐慌〕

音交換がどのような原理で起こるのかについての研究は，筆者の知る限りあまりなされていないが，伊藤（1985）では『調音点が「後部→前部」が，「前部→後部」に移るような音交換が多いのではないか』という仮説を提出している。この仮説に当てはまるのは(1) k-t → t-k, (2)

tʃ-ʃ → ʃ-tʃ, (3) ʃ-m → m-ʃ, (5) z-m → m-z, (9) tʃ-t → t-tʃである。また、交換しやすいのは調音点が類似しているもので、(1)では閉鎖音、(2)は破擦音と摩擦音の交換で、幼児もよく音習得の過程で交換しやすい音で、調音点が類似している。同じことが(9)についてもいえる(伊藤, 1985参照)。

#### b) 非隣接音交換

- (1) ジャイケルマクソン [マイケルジャクソン]
- (2) いんはえなもの [縁は異なもの]
- (3) ガスバイド [バスガイド]
- (4) インショメーホン [インホメーション]
- (5) きょくさいこうりょく [国際協力]
- (6) シガヒ白楽 [東白楽]
- (7) カイバンラン [回覧板]
- (8) よむノーグルト [のむヨーグルト]
- (9) ちょうしゅう的 [抽象的]
- (10) あしあげとり [あげ足とり]
- (11) そうだんな [そうなんだ]
- (12) ナンモジヤカンミン [カンボジャ難民]
- (13) さまざま [まざまざ] と思い出される
- (14) 伝染ばうよびょう [伝染病予防]

非隣接音の場合は、隣接音にくらべ、音の類似性が交換の引き金になっている場合は少ない、といえるようである。音の類似性からいえば、(3)が濁音、(5)が閉鎖音、(9)がわたり音、くらいなものである。(12)は音交換の距離がかなり遠い。

### 4. 音交換

#### a) z → ʒ

- (1) みじゅ(ず)に慣れて……
- (2) じゅ(ず)るい
- (3) しみじゅ(ず)さん
- (4) 裁判じゃ(ざ)た

[z]が弛緩(lax)音の[ʒ]に置換えられる例は多い。ただ、次のように逆の場合もある。

(5) 慶応義ず (じゅ) く

b) s → {

- (1) おしえ (せ) ち
- (2) 大しゃ (さ) かじょう [大阪城]
- (3) しょ (そ) れこそ
- (4) 少しゅう (すう) 民族

このように緊張音の [s] が弛緩音の [ʃ] に転換する例は多い。

c) { → tʃ

- (1) おち (し) り
- (2) しゃち (し) ょう [車掌]
- (3) むかち (し)
- (4) じっち (し) [実施]
- (5) おち (し) ゃれ
- (6) 文字しゅ (し) 料

[ʃ] が [tʃ] に置換わる, ということは, 伊藤 (1985) でもみたように, [tʃ] の方がより発音しやすい音である, ということがいえよう。幼児の音の発達からいっても [tʃ] → [ʃ] 発達順序を取る。

d) ts → tʃ

- (1) シュジュチュ (ツ) [手術]
- (2) ニガチュ (ツ) [二月]

e) tʃ → t

だいた (ちゃ) ん

f) s → t

せんて (せ) い

g) ts → s

おます (つ) り

伊藤 (1985) で検討したように

s → { → tʃ → ts → t

の順に置換が起こりやすく, 幼児は逆の順序で習得が進む。有標 (marked), 無標 (unmarked) の点からいうと, s が最も有標性が高く, t が最も低いということになる。

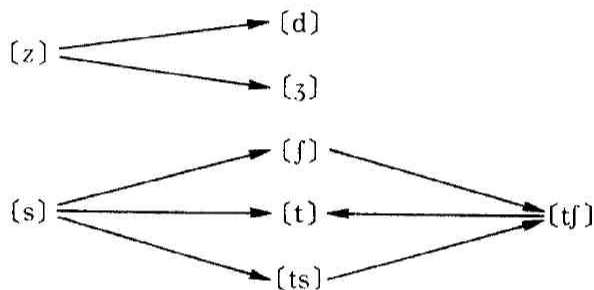
h) z → d



- (1) なで (ぜ)
- (2) かだ (ざ) らない
- (3) 現だ (ざ) い変動相場制の下で……

[z] が [d] に置換わる方言は各地にあり, 筆者が経験した例としては, 三重県熊野地方で「ぞうきん」のことを「どうきん」といつていた。また, ダイサン (財産), フクダツ (複雑), ダシキ (座敷), ヒダ (膝), ダブトン (座布団) 等と発音する方言もある (田井, 1978, p. 94)。

以上の音転換の傾向をまとめると次のようになろう。



### [z] [s] の転換傾向

#### i) y 音挿入

- (1) うちゃ (た) った [歌った]
- (2) 教室きゃん (かん) きょう [教室環境]
- (3) がりょう (ろう) [画廊]
- (4) キりョ (ロ) メートル
- (5) きょうきょ (こ) く [峡谷]
- (6) きんりょう (ろう) 感謝の日

伊藤 (1988) で指摘したように, 子音と母音の間に「わたり音」(glide) を挿入することによって, 発音を容易化している, といえよう。名古屋, 岡山方言の特徴の一つとなっている。次のように逆の場合もある。

- (7) やくぼう (びょう) がみ [厄病神]
- (8) 糖尿ぼう (びょう)

#### j) 前方化 (fronting)

- (1) 大ち (き) い

(2) しも (ご) と

(3) きょうた (か) い [教会]

(1)では後方子音の〔k〕から前方子音〔t〕へ、また、(2)は後方子音の〔g〕が前方子音の〔m〕に転換したものである。(3)は〔k〕が前方子音〔t〕に置換わっている。幼児も「大ちい」という発音をする場合があり、後方よりも前方の方が発音しやすいのではないかと思われる。信濃東筑摩郡の方言ではカカシ(覚志)駅をタカシという。また、高松ではオカアサン(お母様)をオタアサンと発音する。

k) b → m

(1) いちま (ば) ん

(2) しま (ば) た

音韻変化で「破裂運動の消滅にともない、バ行音〔b〕は鼻音のマ行音〔m〕に転化」(田井, 1978, p.105)する場合がある。例えば、ネブル(眠る)、ネブタシ(眠たし)はネムル、ネムタシになった。また、「アラブ」(荒ぶ)の子音が転移したアバル(暴る)をアマル(九州方言)、アバレモノ(暴れ者)をアマリモン(南島)という」(田井, 1978, p.106)。

## 5. 音の脱落

a) [s] [ʃ]

(1) クリ\_\_マス (クリスマス)

(2) に\_\_ほう (にしょう) [2勝]

(3) むずか\_\_いい (むずかしい)

(4) なりま\_\_て (なりまして)

(5) きび\_\_くする (きびしくする)

(6) よろしくお願い\_\_ます (します)

伊藤(1985)で指摘したように緊張音で有標性の高い〔s〕〔ʃ〕は脱落しやすい。また、方言でも〔s〕音は脱落しやすい〔例：カカサマ(母様)→カカマ(新潟方言)、ハシラ(柱)→ハラ(奄美大島方言)、オモシロイ(面白い)→オモロイ(大阪, 京都方言)]。

b) r

(1) 貿易収支のく\_\_じ幅 (黒字幅)

(2) キャ\_\_メル [キャラメル]

音韻変化で[r]が脱落する例は少なくない〔例：カリナ(仮名)→カナ, カリテ(糧)→カテ, トリサカ(鶏冠)→トサカ〕。方言でも次のような脱落がある。オオツゴモリ(大晦日)→オオツゴモ(愛知, 美濃, 山口)(田井, 1987)。

## II. 形態上の誤り

### 1. 形態音韻的(morphophonemic)不完全変化

- (1) くるしくないかった
- (2) これとてもおいしいいでした
- (3) これすきくない

(1)は生成文法的に言えば「基底形」(underlying forms)が形態音韻変化,つまり,「くるしくない」の最後の「い」を落とす操作をしないまま表層化したものである。(2)は佐々木(1989, p.32)にもあるように,日本語を習得中の外国人がおかす誤りの一つで,「これはおいしいです」を過去にする場合,形容詞を過去形に変える,という規則が適用されていないもので,かなり一般的な誤用である(宮崎, 1976)。(3)は形容詞に適用する規則を形容動詞に適用してしまった誤用で,これも極めて一般的な誤用である。

- (4) かわいいなな犬
- (5) 聞くの場合
- (6) ことのこまか
- (7) 来たない
- (8) 示したいる

(4)は形容動詞の活用を形容詞に適用したものである。(5)(6)は日本語習得途上の外国人が「私が行ったのとき,面白いのこと」(宮崎, 1976)のような誤用をする接続上の誤りである。(7)(8)は形態音韻上の誤りである。

- (9) すずしに(く)なった
- (10) 暗記しなか(く)って
- (11) 発表を終り(ら)させていただきます
- (12) 不審な人が浮かべ(び)国際手配しました
- (13) これを増え(や)したらどうかね

(14) はずかしさが (くて) 話せない

(9)から(14)までは形態音韻変化上の誤用で、(11)は「終り」を「終ら」とし、更に「させていただきます」の「さ」を落とす操作が必要で、二重の誤りといえよう。(13)は「増え」では自動詞で、「増や」となって他動詞になる訳で、他動詞化ができていない、といえよう(自、他動詞の問題については伊藤, 1985参照)。

## 2. 不変化詞の脱落

- (1) 明日ここ (に) 来るね
- (2) そこ (に) きてね
- (3) いた (く) ない

不変化詞の脱落については、伊藤(1985)でかなり詳しく論じているので、ここでは次の指摘だけにとどめる。不変化詞は文生成において、後の方で挿入されるものであり、しかも大抵の場合、場面から不変化詞がなくても意味関係は察しがつく、ということから省略されやすいのではないかと考えられる。幼児の言語発達においても不変化詞の習得は遅い(伊藤, 1990参照)。

## 3. 省 略

- (1) 彼等 (の) 基礎訓練
- (2) いつ (も) ぼくは
- (3) あの人 (ってことが) わかっていたらね
- (4) ア (シノ) コ
- (5) きれいな (ビルのカルチャーセンター) 会員になる
- (6) おっこつ (ちる)
- (7) かぎ (をにぎ) る
- (8) ぶ (っ) ぎょう [仏教]
- (9) マドリー (ド) で……
- (10) 居残ってし (まっ) た
- (11) 京都 (大学) の問題
- (12) 気持ちを (あら) ためて
- (13) お (ん) せん旅行
- (14) 独占ス (ク) ープ
- (15) こ (んどはど) なた?

(16) バイ(クノタイ)ヤ

ほとんどランダムに列挙してみた。偶発的なものもある。(4)(6)(12)のように[s][r]のような発音困難な音が脱落すると考えられる場合もある。

4. 混合(Blending)

- (1) かんわん(韓国+台湾)
- (2) サモリ(サンマ+タモリ)
- (3) かはだ(からだ+はだ)で感じられた
- (4) トピッチャー(投手+ピッチャー)
- (5) ネパラヤ(ネパール+ヒマラヤ)
- (6) そうでろ(そうでしょ+そうだろ)
- (7) 食べましちゃった(食べました+食べちゃった)
- (8) コロケッチ(コロッケ+ケチャップ)
- (9) ふはん(不満+批判)[TVニュース]
- (10) ぶたにねんぶつ(豚に真珠+馬の耳に念仏)

英語の混合の例として次のようなものがある。

- (1) There's a back (batch+pack) on my desk.
- (2) I bess (bet+guess) you.

(Shattuck-Hufnagel, 1979)

- (3) and would like to enlicit (enlist+elicit) your support.
- (4) Have you ever friven (flown+driven) at night?
- (5) He misfumbled (mishandle+fumbled) the ball.
- (6) He is very cable (calm+stable).
- (7) That's terrible (terrible+horrible).

(Garrett, 1980)

二つの語(句)が一度に頭に浮かび、その選択がなされないまま発話されて、こういった混合が生じるものと考えられる。

III. 統語上の誤り

1. 語彙交換

- (1) 主権が政治にかかわる。
- (2) 実のまわりに種がついている

- (3) 男を持った包丁が押入り……
- (4) 変路進更
- (5) お湯に頭がかかる
- (6) フライパン用オムレツ

大体、近い距離で同じ句内で、しかも(1)(4)(6)のように意味的に関連しあった語同士が交換しやすい、といえよう。そして、同じ品詞同士の場合が多い、といわれる。次に、英語の例を挙げておこう。

- (1) I got into this guy with a discussion.
- (2) I went to the mechanical mouse for an economy five and dime.
- (3) ……read the newspaper, watch the radio and listen to TV.
- (4) Once I stop, I can't start.
- (5) That wasn't a tiger, that was a lion.
- (6) Older men choose to tend young wives.
- (7) As you reap, Rogers, so shall you sow.
- (8) No one is taking you into talking…… (a nap)
- (9) How much can I buy it for you from?
- (10) Which was parallel, to a certain sense, in an experience of  
……

(Garrett, 1980)

これらの英語の例では(4)(5)のように節と節にまたがる場合もあるが、比較的距離の近いところで、節同士が意味的にかなり密接な関わりを持ち、その中のキーワード的な語同士の交換で、(4)では反意語的な意味関係と同時に〔st〕という音声的類似性もあり、「類似関係の高いものは交換しやすい」という原則に基づいている、といえよう。(8)も音声的類似性 (t \_\_ ing) が交換の引金になっているといえよう。それから、(9)(10)のように前置詞が交換する例は比較的珍しく、日本語でも次の例のように助詞の交換が珍しいことと呼応しているといえよう。

- (11) 世界に股をかける
- (12) ほこりに目が入る

## 2. 過剰 (redundant) 表現

- (1) 頭痛が痛い

- (2) 年とった老人
- (3) 新しい新人
- (4) 馬から落馬する
- (5) お年寄りのおばあさん(TV)
- (6) 新しい新型
- (7) 編集集中の最中である……
- (8) 海底の底

このような余剰的表現は割合多く、そういった表現によって相手に自分の意図を確実に伝えようとする話手の、無意識的努力の表明とみなすことができよう。また、見方によっては一種の echolalia 的現象ともみられよう。

#### IV. 意味上の誤り

##### 1. 意味のズレ (semantic deviations)

- (1) より包括的な仕事(方)
- (2) 創(成)立している
- (3) 大きな功(業)績
- (4) 町(村)の庄屋さん……
- (5) 鼻(あご)で使う
- (6) 千代の富士が引退(休場)だって……
- (7) 入学(社)
- (8) 投函(稿)

(1)(2)(8)は意味的というよりも、音声上の類似が誤用の引金になっているのかも知れない。(3)~(6)は意味的な類似性がからんでいるように思われる。

##### 2. 反意語的表現

- (1) おりの外(中)
- (2) その年の初期(最後)
- (3) 頭が下(上)らない
- (4) 短かく(長く)ない
- (5) 非常コックを締め(開け)たり
- (6) そんなにいたくない(いたい)の？

(7) 考える (ない) 訳じゃない

伊藤 (1985) でも論じたように、反意語の誤りの多い理由として、反意語同士はわずかの意味特性を除いて多くの意味特性を共有しており、「心的辞書」(mental lexicon) においては背中あわせに配置されており、そのため、間違いやすいものと考えられる。

## 参 考 文 献

- Garrett, M. 1980 "Levels of processing in speech production" In B. Butterworth (Ed.) *Language Production Vol. I Speech and Talk*, New York : Academic Press.
- 伊藤克敏 1985 「言い誤りの心理言語学的考察」神奈川大学『人文研究』第91集。
- 伊藤克敏 1988 「言い誤り (Speech errors) の傾向に関する考察 (I)」神奈川大学言語研究センター『神奈川大学言語研究』第11号。
- 伊藤克敏 1990 『こどものことば—習得と創造』勁草書房。
- 宮崎茂子 1976 「第二言語習得の問題点 <日本語の学習におけるエラー・ナリシス>」『言語』(大修館書店) Vol.5 No.10。
- 佐々木瑞枝 1989 『留学生と見た日本語』新潮社。
- 田井信之 1978 『日本語の語源』角川書店。